

ヘンリー・ジェームズのアメリカ観 (1)

藤 野 早 苗

父 Henry James Sr.(1811-1882) の教育方針のもと幼少の時から新大陸と旧大陸の間を行き来して育った Henry James (1843-1916) は、1875年にはヨーロッパを定住の地として選び、アメリカを後にした。以後、1881年から83年の間に両親の相次ぐ死をはさんで二度帰国したが、それから後は1904年まで20年以上もアメリカを訪れることはなかった。このように確かにその身はヨーロッパに置き、ヨーロッパの生活に溶け込んでいたように見えるジェームズだが、彼の意識はあくまでアメリカ人であり、アメリカに対する思いと関心は終生消えることはなく、それはまさに彼の作品の中核をなす要素であった。彼がヨーロッパを定住の地としている間に、アメリカは巨大な資本主義国へとまっしぐらに急速な歩みを続けて行った。それを遠くから見守るジェームズの心には不安と懸念が渦巻いていたにちがいない。そして時間を置いてのアメリカ訪問は彼の心にアメリカ社会の変化を一層鮮明に印象づけたであろうことは、1881-3年と1904年のアメリカ訪問後に書かれた作品に色濃くあらわれているのである。ジェームズの目に映ったアメリカ、及びアメリカ人の変化がどのようなものであったのか、そしてそれを彼の倫理観あるいは道徳観はどう受けとめていたのかをたどってみることは興味深い問題である。本論ではロンドンに落ちつき、小説家としての活動を始めた頃のジェームズのアメリカ観を初期の作品である「アメリカ人」(*The American*)¹ (1877)、「ヨーロッパ人」(*The Europeans*)² (1878)「デイズ・ミラー」(*Daisy Miller*)³ (1878) の分析をとおして見てみたい。

I

「アメリカ人」は1875年から76年にかけて執筆され、76年の6月から翌年の5月まで *Atlantic Monthly* に連載された。New York Edition のPreface の中でジェイムズはこの物語のアイデアはその数年前に浮かんだものであったが、実際に書き始めるのにはかなり練りあげる必要があったので、いつかは日の目を見ることに望みを託しながら、“the deep well of unconscious cerebration”⁴ の中にしまっておいた。それがパリに住みはじめて間もなく急速に具体的な形になって見えてきた。そして、心配されていた客観性の裏付けもできたと言っている。その時の状況は生き活きと次ぎのよう述べられている。“I saw from one day to another my particular cluster of circumstances, with the life of the splendid city playing up in it like a flashing fountain in a marble basin.”⁵

「アメリカ人」の舞台はパリ、物語が始まるのは1868年の5月である。アメリカは南北戦争後、北部諸都市を中心に産業がめざましく発展し、その結果、新興成り金階級が排出した。彼らは大挙してヨーロッパに押しかけ、大都市や避暑地の高級なホテルに長期間滞在し、豊かな財力にまかせて、美術品や衣類を買いあさったということである。そこには伝統あるヨーロッパの文明に対してあこがれを持つ新興国アメリカという建国以来変わらぬ鮮明な構図があるとともに、19世紀後半になると、経済的に衰退の兆しの見えはじめたヨーロッパに対して、豊富な資源を背景に急成長の最中にある豊かな国アメリカという新たな構図ができてきたことに注目しなければならない。ジェイムズは「アメリカ人」の中でまさにこの二重の構図を物語の situation として設定し、そこで展開される人間の心の相剋を描いているのである。

「アメリカ人」の主人公ニューマンは典型的な新興成り金の一人である。10歳で学校をやめ、14歳の時から街頭に放り出されて自活せざるを得なかった。努力と才覚であらゆることに挑戦して様々な経験を経たのち、サンフランシスコで事業に成功し、大金持ちになった。はじめてニューマンに言及するに際し、ジェイムズは“the superative American” (2) と表現し、その堂々

とした体躯、いかにも健康そうな様子、ゆったりとおおらかな態度、人のよさそうな親しみやすい感じ等々、成功者としてのアメリカ人が持つ良いイメージで紹介している。一生使っても使い切れないほどの財産をつくった彼は、ある時急に金儲けに嫌気がさして突如事業から身を引き、“the biggest kind of entertainment a man can get”を求めてヨーロッパにやって来たのである。彼はルーブル美術館で偶然出会った旧知のトリストラムに次ぎのよう言う。“I want to see the tallest mountains, and the bluest lakes, and the finest pictures, and the handsomest churches, and the most celebrated men, and the most elegant women.” (33) 彼のこの言葉で注目すべきは“the tallest”, “the bluest”, “the finest” というように、すべて最上級を使っていることである。つまり、彼は最高のものを手にしたいこと、そして手にするだけの自信があることを表明しているのである。しかし、彼は自分でも認識しているように、教養はなく、例えば美術館でもガイドブックを頼りに「必見の名画」を追って見歩いている状態であるし、時にはコピーの方がオリジナルよりも良いと思ったりするくらいである。そのような彼に最上級のものを手に入れるのだという意志を持たせる強さはいったいどこからきているのだろうか。それはまぎれもなく経済的裏づけである。しかも彼には自分の財産は様々の困難を乗り越えて自分の手でつくったのだという経験の支えがある。“I know the best can't be had for mere money, but I'm willing to take a good deal of trouble” (33) というニューマンの言葉の背後には「困難は必ず克服できる」という自信がはっきりとうかがえるのである。しかし、ニューマンのこの自信は危険でもある。なぜなら、それは異文化の中に入っても恐れを感じないと同時に、その文化を理解しようという謙虚さも失わせてしまうからである。パリに到着して間もない頃、トリストラム夫人はヨーロッパ社会の複雑さについて忠告を与えるが、ニューマンはそれを“a part of the show” (40) として何ら気にかけない。

ヨーロッパで最高のものを手に入れたいニューマンがその中でも最も望んでいるものは妻である。長年苦勞しながら一生懸命働いてやっと成功した今、

自分の成功を象徴するような妻を持ちたいのだという。しかし、好みの女性の具体的なイメージがあるのではなく、とにかく“a great woman”がほしいのだという。つまり彼にとっては人が注目し、称賛するようなすばらしい妻を持つことが“a part of success” (50) であり、自分はそれに値すると考えているのである。彼は次ぎのようにも言う。“I want to set about it rather grandly. I not only want to make no mistake, but I want to make a great hit. I want to take my pick. My wife must be a pure pearl. I've thought an immense deal about it.” (48) ニューマンの言葉を聞いたトリストラム夫人が「それではまるであなたの結婚は“a matter of heartless pomp” (50) じゃありませんか」と言うが、実際ニューマンの結婚観にはすべての尺度を経済力におく彼の考え方がきわめて自然にあらわれている。ニューマンは自分の経済力をもってすれば“the best article in the market” (49) を手に入れることができる筈だと信じて疑わない。ここで彼は“article”という言葉を使っているが、彼が「妻」のことを考える場合それは彼の“property”以外の何ものでもない。この他にも“a pure pearl”, “statue”, “a rarity”などの言葉を使っていて、彼が妻のことを自分が「所有」したい「価値あるもの」と考えていることは明らかだし、手に入れられるはずだという自信もうかがえるのである。彼は次ぎのようにも言っている。“I can give my wife many things, so I'm not afraid to ask certain others myself. She shall have everything a woman can desire ;I shall not even object to her being too good for me.” (49) ニューマンのこのような考え方はいかにも非人間的であるが、これは彼が特別に非人間的というのではなく、急速な産業化が進むアメリカ社会全般の現象と言えよう。なぜならジェイムズの描くニューマンはおよそ冷たさを感じさせない、いかにもお人好しで単純な、しかし自信にみちたアメリカ人だからである。またどんなにすばらしいものであっても，“everyman has an equal right to” (50) と信じるニューマンの考え方はアメリカの建国の精神に基づくものであると同時に、無一文から出発して財産を築きあげた実績に裏付けられているものである。

ニューマンにトリストラム夫人が紹介したのは800年の歴史をもつ古い家柄のベルガルド家の娘クレアである。彼女は親の仕向けた不幸な結婚によりサントレ夫人となったが、夫は死亡し、今は母親や兄弟と一緒にベルガルド家で生活している。ニューマンは一目で気に入る、母親や長兄の権力が絶大なベルガルド家を足繁く訪れ、サントレ夫人に求婚することになるが、この求婚をめぐるニューマンのアメリカ人らしさが鮮明にうちだされる。まず第一にニューマンは多くのアメリカ人と同様ヨーロッパの文化に対して漠然としたあこがれを持ちながら、その歴史や文化がどのようなものであるかについては全く知識がなく、従って評価もできない。だからこそ何ら躊躇することなく自分の視点で見て、きわめて自然に振る舞えるのであるが、そのことが気位の高いベルガルド家の人びとを苛立たせることにもなる。ベルガルド家の中ではニューマンに最も好意的なヴァレンティンでさえも、ニューマンがサントレ夫人と結婚したい意志を示し協力を要請した時非常に当惑し “I don't know whether it lays me flat or makes me soar.” と言い、さらに “You're perfectly serious?” (157) と念を押す。次ぎに示すこの時のふたりの会話はニューマンとベルガルド家が絶対に理解しあうことはないであろうことを暗示している。

“Do you mean that I must *claim* a social standing and hang out my sign? What sort of swagger's that? If it's a question of pretensions—pretensions, that is, to your own ground, the very highest. Only it isn't, it seems to me, for me vulgarly to make them; it's for you, assuming them, to invalidate them. . . .”

Valentin's fine smile suffered a further strain. “Haven't you manufactured and placed in the market certain admirable wash-tubs?” (158)

ニューマンに対して好意を抱いているヴァレンティンの驚きに窺えるように、ニューマンとベルガルド家では結婚についての考え方がまったく異なっている。ニューマンは結婚は個人対個人の問題と考えているのに対し、ベル

ガルド家では結婚は家と家との問題である。しかもそれは今に始まったことではなく、長い家系の中でほとんどがold familiesとの間で婚姻関係を結んでいるのである。従って当然のことながら、アメリカ人でたたきあげの実業家であるニューマンとサントレ夫人との結婚は考えられない。一方、ニューマンは“You'll decide for yourself if you like me or not.”と言っているように、あくまでサントレ夫人個人に対して呼びかけ、彼女自身がニューマンを信頼し、ついてくれば問題ないと考えている。ニューマンのプロポーズには個人に信頼を置く真にdemocraticで、しかも経験に裏付けされた自分の能力に自信を持つ成功者の前向きで力強い姿勢が打ち出され、それはとりもなおさず新しい時代をになうアメリカ人の象徴的姿と言える。プロポーズの中でも、“If you want grandeur, everything in the way of grandeur that money can give you, why you shall have it.”(170)と言っているように、ニューマンは自分の経済力に絶大なる信頼を置いているわけだが、お金がとかく物事を判断する尺度になってきたのは19世紀後半のアメリカ社会に顕著な現象であることは確かである。しかしジェイムズはそれが新興国アメリカに限らず旧社会にも蔓延していることをベルガルド家の人びととニオシュ父娘をとおして示している。まずベルガルド家の人びと、特にベルガルド夫人と長男のベルガルド侯爵であるが、彼らはサントレ夫人の最初の結婚についても、お金目当ての結婚を強行したのであった。古い家系を誇り、気位が高くても、家系と気位だけでは生活のレベルを維持していけない時世である。だから家柄も教育もなく、自分の身ひとつでたたきあげ財産を築き上げた実業家のニューマンを毛嫌いしながらも、彼の財産は抵抗しがたい魅力である。ニューマンがベルガルド夫人にはじめて正式に紹介され面談した場面は、ニューマンの率直さ、物おじしない自信と対照的に、ベルガルド母子の気位の高さ、陰湿さが強調されるとともに、その気位の下でニューマンの財産に抵抗しがたく引かれていく様子が実にたくみに描かれている。サントレ夫人との結婚に賛同してほしいと話すニューマンにベルガルド夫人は小さな口を丸めてはっきりと“No”と言い、“I'm a very proud and meddlesome old person.”と言うが、すかさずニューマンが“Well, I'm

very rich.”と言い返すと、夫人はしばらく床をじっと見つめていたが、やがてその目を上げ、“How rich?”とはっきりした言葉で尋ねる。そしてニューマンが自分の収入を概数でフランに換算して述べ、説明を加えると、それはまさに“a sufficiently striking presentment of his resources”となったことは確かで、夫人は露骨な関心を示し、次のように言う。

“I would rather, on the whole, get all the good of you there is—rather, I mean, than, as you call it, let you alone. I would rather,” she coldly smild, “take you in our way than in your way. I think it will be easier.” (197)

そしてニューマンを毛嫌いしながらもその経済的魅力にひかれて婚約パーティーを開くところまではいくが、それが限度で、折りよく現れた遠縁のイギリスの貴族で財産のあるディープミア卿に関心を移してしまい、結局ニューマンには理解しがたいまま、結婚話は破れてしまう。サントレ夫人は修道院に入ってしまう、親の思惑通りにはいかないことになるが、それにしても、娘の幸せを第一に考えるよりも、気位、そしてその気位と妥協してもお金へと手が伸びかけるほどに、ヨーロッパの由緒ある社会にもお金の必要性は厳しくのしかかってきているのである。

ベルガルド家の次男ヴァレンティンの場合は母親や兄とは異なり、ニューマンの財産を欲しいというのではなく、自分の力で財産をつくりあげたニューマンの実行力に心酔し、かつ羨望の目で見ている。

You’ve made a fortune, you’ve raised an edifice, you’re a financial, practical power, you can travel about the world till you’ve found a soft spot and lie down on it with the consciousness of having earned your rest. And all—so fabulously! —in the flower of your magnificent manhood. (132)

ヴァレンティンのこの言葉には“the exact reverse of all that”としての自分、つまりベルガルド家の人間ということで何をすることもできず、若い身をもてあましているヴァレンティンのやりきれなさが滲み出ている。“beastly rich” (132) であるニューマンのことを“a successful man” (131)

と言い、自分を“a dead failure”(132)とみなすヴァレンティンは明らかに母親とは異なり、覚めた目で経済力のある者の力を認め、家柄に固執することのむなしさを実感しているのである。しかし、そのヴァレンティンもアメリカに連れて行ってビジネスにつかせようというニューマンの誘いを尻目に、ノエミ・ニオシュのようなくだらない女のために名誉をかけ決闘で命を落としていく。

「アメリカ人」の中でニューマンとサントレ夫人との物語の流れとは別に、ニオシュ父子の物語が続いていくが、これはニューマンを介してノエミとヴァレンティンを結びつけ物語を展開させるプロット上の手段であると同時に、ヨーロッパ社会の上流階級と底辺を生きる人間との対照も示している。ベルガルド夫人は喉から手が出るほどお金が欲しくても気位高く肩をはっているのに対し、ノエミはしたたかに行動にでる。へたくそな絵に関心を示したニューマンに悪びれず2,000フランを要求するし、次々とパトロンを見つけ、ぜいたくに身をつつんでいく。貧相な父親は娘の行動を嘆きながらも、結局娘から金をもらって生きていく。ノエミは自分が原因でヴァレンティンが命を落とすことになったにもかかわらず、平気な顔で、こともあろうにディープミア卿の愛人になってロンドンの公園を歩いている。そのノエミの姿は、ニューマンもディープミア卿も失い、娘は修道院に入ってしまった、ひっそりと暮らすベルガルド家とは対照的に、お金のためなら何でもやってのける底辺の人間のしたたかさを印象づけている。

このように「アメリカ人」においてジェイムズは新興国アメリカにおいてばかりでなく旧社会においても、お金が人びとの意識や生活を支配するようになってきていることを描いている。そういう中で、他人を利用しようとする旧社会の人びとの陰湿さに比し、自己信頼に基づき前向きなアメリカ人の明るさ、人のよさというものをジェイムズは認め、強調しているのである。⁶ニューマンはベルガルド家への復讐のチャンスをつかみながら、それを放棄し、しかも復讐しようなどと考えた自分を恥じ入る。そういうニューマンだからこそジェイムズは“superative American”としているのである。南北戦争後急速に産業化が進むアメリカ社会の中心的存在である実業家たちが巨

万の富を背景に大挙してヨーロッパに押しかけていく姿は、ヨーロッパ人にとって鼻持ちならないものであったにちがいない。しかしヨーロッパに定住することを決めたこの時点のジェームズにとっては、それが過去の遺産に頼り停滞しているヨーロッパ社会とは異質の、勢いある力と映ったであろうし、傍若無人ではあるが率直でお人好しのアメリカ人の「良さ」というものを認めていたものと思われる。しかし、同時に、旧社会と新社会が理解しあうことの難しさも十分に認識している。だからこそ“a happy ending”にはしなかったのであるが、1877年3月30日付けのW. D. Howells宛の手紙⁷の中でジェームズは、人間は“the product of circumstances”であるから、ニューマンとサントレ夫人の結婚は不可能であることを強調している。

... it could have been impossible : they would have been an impossible couple, with an impossible problem before them. ... No, the interest of the subject was, for me, (without my being at all a pessimist) its exemplification of one of those insuperable difficulties which present themselves in people's lives and from which the only issue is by forfeiture—by losing something.⁸

同じ手紙の中で次のようにも言っている。“I should have felt as if I were throwing a rather vulgar sop to readers who don't really know the world and who don't measure the merit of a novel by its correspondence to the same”.⁹これはジェームズが両社会を実際に体験して知っているからこそその言葉であり、彼の小説が現実の社会をふまえたものであることを示している。

ところで、「アメリカ人」にはニューマンとは異なったタイプのアメリカ人が登場している。まず美術館で彼が遭遇したトリストラムであるが、彼は6年前からパリに住み、所帯も持って、パリをよく知っているかのように振る舞うが、それまでルーブルへは一度もきたこともないし、パリ社会には全く溶けこんでいない。いわゆる“American colony”の中に閉じこもってボーカーをしたり、酒を飲んだりして過ごしている。それでいてアメリカのこ

とを悪く言う。

次にニューマンがオランダ旅行中に知り合い、しばらく一緒に旅をしたバブコックがいる。彼はボストン郊外の小さなユニテリアン派の牧師で、教会員の募金により、精神を高めるためにヨーロッパを旅しているという非常にきまじめな青年である。自分の立場と使命を強く認識し、ヨーロッパの文化遺産を見てまわるが、心の底ではヨーロッパが大嫌いで、食べ物についてもわざわざパリの“American agency”でhominyを一袋買って持ち歩くといったぐあいである。従って、何でも受け入れてしまうニューマンの知的寛大さに腹を立て、彼の“a want of moral reaction”を改めさせようとするが思うようにならず、結局訣別してしまう。ピューリタンの体質のバブコックにとってはニューマンは理解できない人物で、“We can never agree.”という結論に至るのである。このことはあきらかに両者は別のタイプのアメリカ人であることを示している。つまり19世紀半ばから後半にかけて輩出してきたニューマンのような実業家たちは、ニューイングランドに以前から住むピューリタンのアメリカ人とは相容れない存在なのである。ジェイムズは「アメリカ人」において、ヨーロッパを舞台にヨーロッパ人対アメリカ人の対比と同時に、アメリカ人の均質性が失われてきていることを示している。

II

「アメリカ人」を出版した翌年、ジェイムズは今度はニューイングランドを舞台にした「ヨーロッパ人」を出版した。1878年7月23日付けの兄 William James宛の手紙の中で“*It is only a sketch—very brief and with no space for much action.*”¹⁰と言っているように、12章から成る軽いタッチの小説で、それぞれの章はあたかもドラマのひとつのシーンのようである。またウィリアム宛の別の手紙の中で、この作品が“*thin and empty*”であるという兄の批評を素直に受けとめ、その“*extreme slightness*”¹¹を認めている。さらに1878年10月30日付けの Elizabeth Boott 宛の手紙の中で、“*I do incline to melancholy endings—but it had been a part of the bargain with Howells that this termination should be cheerful and there*

should be distinct matrimony.”¹²と言ったり、唐突な終わり方は”one hundred Atlantic pages”に納める必要があったからだと弁解するなど、ジェームズ自身この作品を気に入ってはいなかったようで、New York Editionにも入れていない。しかし、ジェームズのアメリカ観を考える時、この作品は非常に重要な意味を持つのである。「ヨーロッパ人」が書かれたのは1878年であるが、その舞台となっているのは1840年代のニューイングランドである。up-to-dateな時代設定の「アメリカ人」を書いた後に、30年も時代を遡ったニューイングランドを舞台にした作品を書いたのはなぜであろうか。そのことを考えながらこの作品を分析してみたい。

ジェームズは「ヨーロッパ人」を出版する前に、R. W. Emerson についてのエッセイを書いているが、その冒頭でエマーソンと T. Carlyle との間で交わされた書簡に言及し、次のように言っている。

They have become, as I say, historical: so many of their emotions, their discussions, their interests, their allusions belong to a past which is already remote. It was, in fact, in the current of an earlier world that the Correspondence began. The first letter, which is from Emerson as the last is from Carlyle, is of the date 1834. Emerson was the voice of New England in those days, and New England has changed not a little.¹³

つまり、ジェームズから見るとエマーソンの時代ははるか遠くに思えるわけで、その間の社会の変化にはめざましいものがあったのである。そういう認識のもとに1840年代のニューイングランドを舞台にした「ヨーロッパ人」を書いていることを理解しておく必要がある。

この作品の題名の「ヨーロッパ人」とは両親ともアメリカ人だが、ヨーロッパに生まれ育ったユージニアとフェリックスの姉弟である。二人は母親の兄にあたる叔父を訪ねてニューイングランドへやって来た。血のつながった親戚でありながら、この叔父を中心とする家族、及びその周辺の人々は、ヨーロッパから来た二人を異質の人間として警戒する。ジェームズは彼らの戸惑いと対処の仕方をとおして、当時のニューイングランドの人々の考え方、生

活の仕方を描いていく。同時に、ヨーロッパから来た二人の目に映るニューイングランドの人々の生活ぶりも描いていく。姉よりも一足先に叔父の家を偵察に行ってきたフェリックスの報告は率直で興味あるものである。まず、その住居については、“a kind of three-story bungalow”で、地元の人の話では“venerable mansion”ということだが、“it looks as if it had been built last night”と言っている。また、その生活ぶりについては、“a plain, homely way of life ; nothing for show”と言っている。そして人々は“sober”で“severe”な感じで、しかし“wonderfully kind and gentle” (61) であると報告する。フェリックスのこの簡単だが要点をついた指摘には、勤勉禁欲でいかにも簡素なピューリタンの生活ぶりが目にうかぶ。彼の報告を聞いてからユージニアは叔父のウェントワースに会いに行くが、彼はまずユージニアに見つめられて、その目が“unprecedented attributes”を持っていることに戸惑い、どうしたものかと悩む。また彼女が“a German Baroness, married ‘morganatically’ to a Prince”であると聞いていたので、“Was it right, was it just, was it acceptable”と自問し、悩む。しかし、とにかく彼女が自分を見つめている以上、“it was *his duty*.¹⁴ . . . to meet her glance” (63) と決心する。初対面のこのウェントワースの態度は、いかにも地域のみんなが同じ信条を持って、勤勉禁欲の生活をおくっていたニューイングランドのピューリタンらしいものである。ユージニアたちを決して悪者と思っているわけではないが、“It will be a different tone” (75) と思って警戒するのである。彼は娘ガートルードに次のように言う。“You must keep watch. Indeed, we must be careful. This is a great change ; we are to be exposed to peculiar influences.” (75) 当時のニューイングランド社会は、ガートルードがこれまで外国人に会ったこともないし、こんなにフランス語を耳にするのもはじめてだと思ったことから推測できるように、およそ外国人など入ってこない均質的社会だったのであろう。そのことはユージニアたちに対するもてなしの仕方にも顕著に表れている。決して彼らを歓迎しないわけではないが、“readjustment of that sense of responsibility”を要するものであった。次の叙述に明らか

である。

The arrival of Felix and his sister was a saatisfaction, but it was a significantly joyless and inelastic satisfaction. It was an extension of duty, of the exercise of the more recondite virtues ;. . . (71)

そして家族で協議の結果、ウェントワース家に隣接する小さな白い家に住まわせることにする。この決定には異質のものに対して距離を置きながら、しかし sense of duty は満足させるという、いかにもピューリタンらしい考えが結集されている。そしてウェントワースは毎日儀礼的に姪を訪問するが、一向に彼女に親しむことができず、本当に自分の姉の子供たちだろうかという疑問すら持つ。彼はこの堂々として、優美で、いかにもレディの姪をどうしても好きになることができないのである。まるで彼女が異なる言語を話しているようにさえ思ってしまう、“He was paralysed and bewildered by her foreignness.” (86) という状態である。このウェントワースの妥協のなさは自分たちを至上と考える排他主義とも言える。例えば、ユーゲニアが何気なくイギリス、オランダというような国の名前を口にすると、すかさずウェントワースは、“I think you will find that this country is superior in many respects to those you mention. I have been to England and Holland.” (65) と言う。彼の書斎には法律書とアメリカの地図しか置いていない。アメリカ以外は彼の視野に入って来ないのである。ウェントワースに限らず、病弱のアクトン夫人の傍らにはエマーソンのエッセイが置いてあるという描写からも推測できるように、この地の人々はエマーソンの考え方に同調していたと言えよう。

ウェントワースやその周辺の人々がヨーロッパ人から来た二人に対して距離をおいて見ている中で、ガートルードだけがこの二人の魅力に強くひかれていく。部屋を美しく飾っているユーゲニアを見て、自分たちの潤いのない禁欲的生活を思い、ガートルードは思わず、“What is life, indeed, without curtains?” (79) と自問する。また、人生に対して楽観的姿勢であるフェリックスと親しくつきあうようになって、はじめて自然体の自分になれることを

発見する。selfishであることを極端に恐れ、人生をdisciplineと見るピューリタンの人生観に対し、フェリックスは“*But there is another way to look at it as an opportunity.*”と考えるのである。ガートルードは今までの自分は無理をして自分を偽っていたことを認識する。彼女は“*good as gold*” (50) のユニテリアン教会のブランド牧師との結婚を彼自身からも、家族からも望まれていたが、彼の説く型にはまった抽象的な言葉に辟易としていたので、自分の感情を自由に絵に表現できるフェリックスに強くひかれたわけである。このようにガートルードはヨーロッパから来た二人によって、自分たちになかったものに気づき、自分を見つめなおすようになるのであるが、二人が到着する以前にすでにピューリタン社会の中で異分子であったことに注目する必要がある。第2章で初登場の時からそのことがうかがわれる。フェリックスがはじめてウェントワース家を訪れると他の人々はみんな教会に行き留守なのに、彼女ひとりが家に残って「アラビアン・ナイト」を読んでいたのである。そして夢の世界に陶醉していて目を上げると、物語の中のカマルザマン王子のようにフェリックスが立っていたというのである。このように教会へも行かず、物語などに夢中になり、わけのわからないことを言う彼女はブランド牧師が言う如く、“*puzzling*” な存在であった。彼女は姉のシャーロットとは異なり、漠然とながら装いにも関心がある。だからこそユージニアの服装や雰囲気にあこがれをもったのである。ユージニアの他にも、必ずしもピューリタンの型に適合していない若者が二人いる。一人はウェントワースの息子クリフォードであり、もう一人は親戚のロバート・アクトンである。クリフォードは飲酒にふけり、ハーバード大学を退学になって、父親の頭痛の種である。中国へも行ったことがあり、よく旅をしているアクトンは立派な書庫を持ち、絵を蒐集し、室内装飾などもウェントワース家よりもずっと華美である。クリフォードはユージニアに対して素直なあこがれの気持ちを持ち、彼女のもとをよく訪れる。アクトンも彼女に興味を持ち、引かれるが、彼女を信用することができない。些細なことで彼女に疑問を持ってしまう。例えば、はじめてアクトンの家を訪れ、病床の母親に会った時、彼女を喜ばそうと思ってユージニアが“*He has talked to me immensely*

of you.”と言うと、アクトンは自分は決して母親のことを話したことがないのに、ユージニアは嘘つきだと思ってしまう。彼はおよそ感情というものを持ちあわせないし、解しない。数学が好きな彼は人間関係も数式にはめて考えようとするので、彼の知識の中にある数式にあてはまらないユージニアのことは理解できないのである。ある晩彼女の家に若いクリフォードが隠れていたのに出会わした彼は、彼女とクリフォードの仲を疑うわけではないが、彼女の言動を受け入れることができない。結局彼女へのプロポーズはしないことになる。彼は興味は持つものの、ガートルードほど積極的にヨーロッパ的なものの価値を信用することができず、従って受け入れることもできない。ヨーロッパを訪れることに意欲を示していたクリフォードも物語の最後ではアクトンの妹と結婚し、ニューイングランドの“narrower circle”での幸せを楽しんでいるという。しかし、ガートルードや、クリフォード、アクトンの例は均質的ピューリタン社会にも異分子的存在が見られるようになってきたことの証拠ではないだろうか。

ユージニアはついに自分はここには住めない、結局ヨーロッパが自分にとって自然な世界であると思い、ニューイングランドを去る決心をする。彼女の次のような述懐はピューリタンの偏狭さについて多くを示唆している。

Her irritation came, at bottom, from the sense, which always present, had suddenly grown acute, that the social soil on this big, vague continent was somehow not adapted for growing those plants whose fragrance she especially inclined to inhale, and by which she liked to see herself surrounded—a species of vegetation for which she carried a collection of seedlings, as we may say, in her pocket.(152)

ヨーロッパに追従せずにアメリカ独自の文化を育てようというエマーソンの考え方は、独立国家としての歩みを確実にする時期に必要であったことは確かだが、一方で、あまりにそれにかたまると、かたくなに自分の殻に閉じこもってしまい、折角の豊かな発芽の芽を摘んでしまうことにもなりかねない。ジェームズはその可能性を危惧していたものと思われる。“Europe

seems to me much larger than America.”というユー・ジュニアの言葉はジェイムズ自身の言葉と言えよう。ジェイムズはNathaniel Hawthorne についてのエッセイの中でも、ホーソーンが生まれ育ち、作品に描く社会はニュー・イングランドの “a small and homogeneous society”¹⁶であることを述べている。そして南北戦争という試練がそういうアメリカ人の意識に変化をもたらしたことを次のように書いている。

... one may say that the Civil War marks an era in the history of the Ameerican mind. It introduced into the national consciousness a certain sense of proportion and relation, of the world being a more complicated place than it had hitherto seemed, the future more trecherous, success more difficult.¹⁷

ジェイムズは「アメリカ人」で南北戦争後の急速な産業化が進む中で登場した新しいタイプのアメリカ人ニューマンを描いた後で、ニューマンに批判的なバブコックのような人たちでかたまっていた南北戦争前の、エマーソンやホーソーンの描くピューリタン社会に焦点をあわせてみたかったのではないだろうか。みんなが一つの信条を持ち、共同体としてまとまって生活していたピューリタンたち——しかし、彼らのあまりの偏狭さにはアメリカが真に豊かに発展していく上で問題があった。そういうピューリタンの生き方に疑問を持つ者もガートルードに見られるように、若い世代の一部には現れ始めていて、内部からも均質性は次第に崩壊していくであろうことを、ジェイムズは「ヨーロッパ人」において暗示している。

フェリックスとガートルードとの結婚という “a happy ending” は芸術と自然、経験と無垢、感情と内省などのヨーロッパ的価値とアメリカ的価値の結合という一つの理想を示唆しているようにも見える。しかし、“a happy ending” は必ずしも自分の意図するところではなかった¹⁸とジェイムズは言っているし、またこの小説がdrama の形式¹⁹を非常に意識したものであることを考えあわせると、ジェイムズがヨーロッパ的価値とアメリカ的価値の結合を現実的なものと認識していたとは考えにくい。ユー・ジュニアはニュー・イングランドという舞台は自分にあわないことを認識して、自分の台詞を語り終え

ると去っていくのである。

III

「ヨーロッパ人」を出版した同年(1878)に、ジェームズは彼の名声を確認可能なものにした「デイジー・ミラー」を出版した。彼自身はそれほど評判になる作品とは思っていなかったようで、謙虚に“A Study”という副題をつけている。しかし、その年の半ば頃にはジェームズはイギリスで最も話題になったアメリカ人作家であったという。²⁰その理由は何と言っても、ヴィクトリア朝の女性像とはかけ離れたヒロインの特異さであろう。周囲を気にせずに奔放に振る舞うアメリカ娘デイジーの姿の新鮮さに読者は目を見張つたであろうことは容易に想像できる。だがジェームズが意図したものは果して奔放なアメリカ娘がヨーロッパ社会に受け入れられず、悲劇的な死をとげたという物語だったのであろうか。物語の舞台はヨーロッパであるし、アメリカの田舎町にいる時と同じように振る舞うデイジーの行動はヨーロッパのマナーに違反し、人々の注意を引いたであろうことは確かである。しかし、物語の中でデイジーに対してはっきりとした反応を示しているのはヨーロッパ人ではなく、アメリカ人たちであることを見逃してはならない。デイジーがローマの町を一緒に歩きまわって人目をひく相手ジオヴァネリはデイジーに何ら積極的な働きかけはしないし、反応も示しはしないのである。また後年ジェームズがNew York EditionのPrefaceの中で、“Flatness indeed, one must have felt, was the very sum of her story.”²¹と言っているように、デイジーは“flat character”である。つまり、彼女は最初から最後まで地のままに振る舞い、存在しているだけで、彼女自身が考えたり、意図的な行動をしたわけではないのである。むしろそういう彼女の存在そのものが周囲の注目を集め、とりわけウィンターボーンをはじめとしてコストロ夫人、ウォーカー夫人などデイジーの周辺にいるアメリカ人が神経質な反応を示し、それが物語の重要な構成要素となっているのである。つまり、この物語はデイジーの行動が引き起こした悲劇というよりも、周辺の人々が追いこんだデイジーの悲劇と言えるのである。ジェームズの関心は単なるデイジー

の物語を書くことではなく、デイジーをめぐるのアメリカ人たちの反応に焦点をあて、それによって南北戦争後の決して一様ではなくなったアメリカ人たちの意識の対立関係を描くことであったと思われる。だからこそ、ジェイムズはウィリアム宛の手紙の中で、“Its success has encouraged me as regards the faculty of appreciation of the English public ; for the thing is sufficiently subtle, yet people appear to have comprehended it.”²² と言っているものと思われる。奔放なアメリカ娘がヨーロッパ社会に受け入れられず、悲劇的な死をとげたという物語ならば明快で、“sufficiently subtle” とは言わないのではないだろうか。

南北戦争後新興成り金たちが大挙してヨーロッパを訪れたことはすでに述べたが、多くの場合、デイジーの家族のように、男はアメリカに残って金儲けに励み²³妻と子供たちをヨーロッパに旅行させた。デイジーの父親はニューヨーク州の工業都市スキネクタディの実業家である。デイジーは母親と弟のランドルフの三人で“courier”を伴い、高級ホテルに長期滞在しながら、ヨーロッパを旅行している。そういうアメリカ人の数の多さはあたかもスイスの避暑地ヴェヴェイがアメリカの避暑地のニューポートやサラトガかと錯覚するほどであったことが、物語の冒頭に記され、高級ホテル“Trois Couronnes”でお行儀のよいヨーロッパ人と対照的に、朝からダンス音楽をかけたり、大声で話したりして傍若無人に振る舞うアメリカ人の姿が描きだされている。ヨーロッパに長く滞在しているウィンターボーンという27歳くらいのアメリカ人の青年がこのホテルでデイジーと会うところから物語が始まる。彼はデイジーの美しさにひかれるが、あたりに無頓着で自由に振る舞い、初対面のウィンターボーンにも臆せず家族のことや、旅のことなどべらべらと喋り、“I’ve always had a great deal of gentleman’s society.” (16) とまで平気で話すデイジーに当惑する。彼は自分はアメリカ人であるという意識は強いものの、彼の判断の基準はヨーロッパで受けた教育であるので、奔放なデイジーの言動は理解できない。自分は長くヨーロッパに住んでいるために、“the young American tone” (16) が分からなくなってしまったのだろうかと思いを感しながら、一方でデイジーがどういう娘なのか

“categorize”しようと頭を悩ます。デイジーのありのままを見ようとしないで、自分の考え得る範疇に納めてみないと落ちつけないウィンターボーンの堅苦しさは、自分と異質のものを受け入れられないピューリタンの堅苦しさと相通じるものがある。彼がカルヴィン派の中心であるジュネーヴに愛着を感じ、離れられないゆえんであろう。しかし、彼は「ヨーロッパ人」のウェントワースほど自分を堅持することができない。なぜなら彼はアメリカびいきのランドルフに自分を重ね合わせると同時に、家庭教師に手を引かれたお行儀のよいポーランド人の少年にも幼い日の自分の姿を見ているように、彼の中にはアメリカ人とヨーロッパ人の両方の意識が混在しているからである。ジェームズはそういう揺れ動くウィンターボーンの意識を進んでは戻るという彼の習慣的動き²⁴で表現している。だが彼の意識の中にあるアメリカは明らかにデイジー一家に見られるアメリカではない。それゆえデイジーの美しさにひかれながら、彼女をどう理解してよいかわからないのである。デイジーは“sophisticated”ではないのでヨーロッパのいわゆる“coquette”の範疇には入らない。そこで苦慮したあげく、“American flirt”という範疇におさめることにする。ウィンターボーンに想いをよせるデイジーの気持ちを理解しようともせず、彼女を“generalize”しようとばかりするウィンターボーンの間人味に欠ける堅苦しさがデイジーを決定的に悲劇に追いやることになるのである。

ウィンターボーンの叔母のコステロ夫人はニューヨークの社交界の人で、非常に自意識が強い。彼女と同じホテルに滞在しているアメリカ人家族のことを知っているかとウィンターボーンが尋ねた途端に彼女は、“Oh yes, I’ve noticed them. Seen them, heard them and kept out of their way.” (22) とはっきりした言葉で答えたことから明らかなように、彼女の目から見るとデイジー一家は“horribly common”であり、“the sort of Americans that one does one’s duty by just ignoring” (23) ということになる。ジェームズとほぼ同時代で彼と親交の深かったEdith Wharton が自伝 *Backward Glance* の中で述べているごとく、19世紀末以前のニューヨークのいわゆる上流階級はold Dutch families, もしくはYankeesであって、世襲した

土地の急騰で裕福になった人たちで、お金のことを口にするのはむしろ恥ずかしいこととしていた²⁵“singularly coherent respectable society”²⁶であったようだ。そういう上流階級の人々は19世紀後半に現れてきたお金の力にまかせて傍若無人の新興の億万長者に辟易としたであろうことは容易に想像できる。コストロ夫人はそのような上流階級の一人であったと思われる。デイジーの父親が“manufacturer”であることをコストロ夫人が軽蔑していることは次のような言い方に一目瞭然と表れている。“Of that young lady’s, Miss Baker’s, Miss Chandler’s—what’s her name?—Miss Miller’s intrigue with that little barber’s block.” (76) デイジーがMiss Millerであることは百も承知の上で、“baker”, “chandler”, “miller”などの“manufacturer”を十把ひとからげにして見ているのである。コストロ夫人はデイジー一家と直接話をするこゝも、つきあうこともなしに、一家がマナーを心得ていないと非難するが、上述の言葉から、彼女がデイジーの一家のみならず新興成り金を総体として軽蔑し、嫌っていることが明らかである。コストロ夫人の態度はアメリカ人の中に二つの相対立するグループが存在するようになったことを示している。そして、その対立の意識は新興成り金の側にはほとんど見られなかったであろうことは、デイジー一家の物おじしない振る舞いから推測される。つまりコストロ夫人のような元々の上流階級が新興成り金に対して脅威を感じ、一方的にあらわな嫌悪を示していたと言えよう。コストロ夫人は常に頭痛に悩まされ、ホテルの部屋にこもったきりである。自ら“exclusive”と認める彼女はデイジーのような新興成り金と交わらないのは勿論のこと、ホテルの公共の場に出てヨーロッパ人と交わることもしない。彼女はまさに自分の世界以外は受け入れないのである。

もう一人デイジーに対して積極的な反応を示すのはヨーロッパに長く滞在するアメリカ人ウォーカー夫人である。彼女は伝統あるヨーロッパに対して新興国アメリカという、ヨーロッパ優位の関係を非常に意識している人で、ヨーロッパに住んでいるがゆえに一層その意識を強めているのである。それゆえ、大挙してヨーロッパを訪れる同胞の新興成り金たちが傍若無人にヨーロッパのマナーにそぐわない行動をすることを極度に恐れているのである。彼女

はデイジーがあたりかまわず自由に振る舞うのを見て、最初はデイジーのマナー違反を自分がそっとかくまおうとする。例えば、人込みの広場でイタリア人ジョヴァネリと待ち合わせているというデイジーを馬車で追う。彼女の意図は “To ask her to get in, to drive her about here for half an hour—so that the world may see she’s not running absolutely wild—and then take her safely home.” (60) ということである。それに対し、 “That would be charming, but it’s so fascinating just as I am” と言って断るデイジーに、 “... but it’s not the custom here.” (61) となおも説得する。それでも応じようとしないうデイジーにウォーカー夫人はあいそを尽かしてしまう。さらに彼女の家でのパーティーにもジョヴァネリを連れて現れ、気儘な行動をするデイジーに我慢ならなくなった彼女はついにデイジーを拒否して、アメリカ人社会から閉め出してしまうのである。ウォーカー夫人のこの態度はヨーロッパに住んでいるアメリカ人の護身術とも言える。デイジーのマナーに反する行動により、アメリカ人が教養も何もなく野蛮であると批判されるのを恐れ、デイジーのような新興成り金の旅行者と自分たちは違うのだということをはっきり示したいわけである。

アメリカ人社会から閉め出され、さらには頼みとするウィンターボーンにも墮落した女として見離されたことを知ったデイジーは絶望的になる。ローマ熱に感染し、それが原因で死ぬことになるのだが、ウィンターボーンが予防薬を忘れないようにのむことを忠告すると、デイジーは “I don’t care whether I have roman fever or not.” (89) と答えていることからわかるように、彼女に生きる希望を失わせたのはウィンターボーンが軽蔑し、見離したことによるものだと言えよう。

このようにヨーロッパのマナーに違反しているデイジーを非難し、拒否しているのはアメリカ人たちである。お金目当てにデイジーとの結婚をもくろんでいると見られているジョヴァネリはデイジーには自分と結婚する意志がないと知りながら、彼女とつきあっていたのだ。デイジーの純粹さを認めていたのは彼一人である。

デイジーはニューマンと同様、南北戦争後に現れた新しいタイプのアメリ

カ人である。一緒に旅行していても母親はまったく役に立たず、気儘に動きまわるデージーの姿は、ガイダンスを持たない、その存在の新しさを象徴的に表している。「アメリカ人」の中でボストンの牧師バブコックがニューマンを批判したごとく、ニューヨーク社交界のコステロ夫人、あるいはヨーロッパに長く住み、古いアメリカ人意識のウォーカー夫人やウィンターボーンはデージーを批判する。ところでニューマンはベルガルド家の不当な仕打ちにあい、落ち込むが、失意の中からまた新たな意欲を持って立ち上がろうとしているのに対し、デージーは悲劇の死をとげる。この差は一体何であろうか。これは他ならぬ性差——つまり女性は自立した存在とは見なされなかった当時の女性観による性差である。気儘に振る舞っているように見えるデージーだが、彼女の存在は他人の意見によって左右され、決して自立たものではないのである。

ジェイムズがヨーロッパに定住するようになって旧社会と新社会の文化の違い、そこに住む人間の意識の違いを強く認識したであろうことは勿論で、それは「アメリカ人」においてベルガルド家の人々とニューマンの対比にもはっきりと示されている。しかし、ヨーロッパに定住するようになった初期の作品である「アメリカ人」、「ヨーロッパ人」、「デージー・ミラー」を分析してみると、ジェイムズが旧社会と新社会の対比以上に、アメリカ人社会の変化に注目していたことが窺えるのである。つまり均質的社会だったアメリカが南北戦争をはさんで次第に多様化していくようすが、アメリカを離れてみて一層顕著にジェイムズの目に映ったものと思われる。ヨーロッパで見かけるアメリカ人も決して一様ではないことをこれらの作品に描いているのである。

「ヨーロッパ人」のウェントワースや「アメリカ人」のバブコックのようなピューリタンの偏狭さ、あるいは「デージー・ミラー」のコステロ夫人のような自意識の強さ、ウィンターボーンの堅苦しさをジェイムズは嫌っていたものとみえる。自分の世界に閉じこもり、他を受け入れようとしないのでは、いくらヨーロッパを旅しても、そこに住んでも、ヨーロッパの文化を吸収することは不可能であり、発展も望めないのである。そればかりか、他人を自分の尺度で判断して偏見に陥る恐れがある。ジェイムズはたとえ荒けずりで

あってもデージーの伸びやかさに好意的であり、ニューマンの人の良さ、自信にみちた前向きな態度に発展していく新しい国アメリカを見ていたのではないだろうか。

(注)

- (1) Henry James, *The American* (New York Edition, Re-issued by Kelly, Fairfield, 1976). 以下、本論中のこのテキストからの引用はそのページを括弧内の数字で示す。
- (2) Henry James, *The Europeans* (Penguin Classics, 1985). 以下、本論中のこのテキストからの引用はそのページを括弧内の数字で示す。
- (3) Henry James, *Daisy Miller* (New York Edition, Re-issued by Kelly, Fairfield, 1971). 以下、本論中のこのテキストからの引用はそのページを括弧内の数字で示す。
- (4) Preface to *The American*, vii.
- (5) Preface to *The American*, viii.
- (6) 1876年10月24日付けの W. D. Howells宛の手紙の中でジェームズは “My subject was :an American letting the insolent foreigner go, out of his good nature, after the insolent foreigner had wronged him and he had held him in his power.” と言っている。
- (7) W. D. Howellsは *The American*が a happy ending でないことを酷評した。
- (8) Henry James, *Letters II* ed. Leon Edel (Cambridge, Harvard UP, 1975) 104—105.
- (9) *Letters II* 105.
- (10) *Letters II* 180.
- (11) *Letters II* 193.
- (12) *Letters II* 189.
- (13) Henry James, “Ralph Waldo Emerson” *Literary Criticism* (New York : Literary Classics of the United States, 1984) 233.
- (14) イタリアック筆者。

- (15) R. W. Emerson はハーバード大学での講演 “The American Scholar” (1837) の中でアメリカがヨーロッパの遺物に頼らず、独自の世界をつくりだすことの必要性を強調している。“Our day of dependence, our long apprenticeship to the learning of other lands, draws to a close. The millions that around us are rushing into life, cannot always be fed on the sere remains of foreign harvests. Events, actions arise, that must be sung, that will sing themselves.”
- (16) Henry James, “Nathaniel Hawthorne” (1879) *Literary Criticism* 319.
- (17) “Nathaniel Hawthorne ” *Literary Criticism* 427 – 428.
- (18) *Letters* II 189.
- (19) ジェイムズは1876年7月29日付けのウィリアム宛の手紙の中で “I know the Theatre Francais by heart !” と言っているように, French stage に習熟していた。パリの批評家 Sarcey の影響を強く受け, 彼自身がドラマを書く時も Sardou や Scribe の “well-made” play に従った。したがって, ドラマを意識すると必然的に a happy ending になる。
- (20) ジェイムズの手紙を編集した Leon Edel は次のように説明している。“By mid-1878 *Daisy Miller* had made him the most talked-of American writer in England.” *Letters* II 81.
- (21) Preface to *Daisy Miller* vi.
- (22) *Letters* II 179.
- (23) *The American* のニューマンはむしろ例外。彼はすでに “ever – lasting fortune” を作っていたのである。
- (24) ウィンターボーンはしばしば進んでは戻るという優柔不断の動きをする。その最も顕著な例は夜のコロシウムでデイジーがジオヴァネリと二人でいるのを見かけた時の彼の反応。
- (25) Edith Wharton, *A Backward Glance* (New York : Charles Scribner’s Sons, 1964) 56 – 57.
- (26) F. W. B. Lewis, *Edith Wharton: A Biography* (New York : Fromm

International Publishing Corporation, 1985) 34.

British-Chinese Steam-ship Rivalry

British-Chinese Steam-ship Rivalry 0.2

British-Chinese Steam-ship Rivalry 0.3

British-Chinese Steam-ship Rivalry 0.4

British-Chinese Steam-ship Rivalry 0.5

British-Chinese Steam-ship Rivalry 0.6

British-Chinese Steam-ship Rivalry 1.0